



気温37度のタイ、バンコクの国際会議というか発表会に私たち日本下水文化研究会(JADE)のダッカ支所のただ一人の専従、トファエル君が発表のために行き見事な発表を行った。まだ結婚したばかりの若き秀才であり、敬虔なイスラム教徒の彼にとっては将来の夢が大きくふくらんだらうと思うとうれしい。同時にいっしょにバングラで協力している地方農村開発省のドクターも来たが、ダッカから車で半日かかる彼の本拠地 BARD (バード) からダッカま

では今、選挙の真っ最中で騒乱状態のため、軍が道を固めていてとても出てこれないはずだったが、どうやら救急車に隠れて出てきたようだ。帰りはどうするのかと聞いたが「わからない。」と言う返事。何しろこの1ヶ月で20人以上が死んでいるのだから仕方がない。

と言うわけで、その BARD でたくさんの人を集めて開く予定の勉強会はあえなくバンコクの屋台に轟沈して撤退。まあ、勉強会のために死ぬことはないわねという話。もう勉強会なんて嫌いだと思っていたら、急に遽早稲田大学でこれからエコ関連を目指す人のための勉強会にいかねばならなくなって、急いで展示ブースなどの用意をして出勤。若い人ばかりで50歳以上は6%というこれからの人たちの集まり。バンコックから帰ったばかりで鼻息の荒いうちの博士は壇上で「君たちは国際援助とか協力などといっているが、もっとも自分の勉強をきなさい。」と鼻息荒く吼えていた。彼はそのまま新宿の餃子屋で「なんで日本酒がないのか、紹興酒でも良いから持ってきなさい。」と吼え続け帰宅した。

それにしても、大学の広大さと設備のよさにびっくりした。あんなところで大切にされて勉強していたら、若い学生のエリート意識は高まり、ますます鼻持ちならなくなって、きたない諸外国の援助など意識下で見下すようになる教育をしているようなものではないのかとこれも飲み屋で紹興酒のグラスをにぎりしめ、二人で吼えていた。

その点沖縄大学の宇井さんはえらかった。雨水をどうやって利用しようかと、校内のトイレに雨水を利用したり、トイレの排水を自然の力を使って浄化する設備を校内に作り、さらに使うという意欲と行動力にあふれて実践していた。きれいではないがそこで育った学生は偏見なく、見て行動していくヒトに育っていくのだらうと思う。これは雪の中のテントで熱燗をちびりちびりやりながらの友人とのぼそぼそした話。だいいち泡盛の古酒を時折携えてきて、その旨さを教えてくれたのはもっとえらかったと私は感謝を込めて思う。逝ってしまったヒトをしのんで飲んだテントの外はコップエルの水がわずかの時間で底まで凍ってしまう寒さで、翌朝のテントの周りの森は真っ白になっていた。

その日は雪の中を風に吹き飛ばされそうになりながら山頂を目指したが、頂上直下の岩と雪の混じった地帯で視界がほとんど利がずに、登っても降りる方向に自信がなく、あと数十メートルを残して撤退。雪の中を延々と下って行った。このところ撤退が続くなー。

しかし、撤退行のさなか、「今度は谷川岳にも行けそうだなー。」とニコニコしている友人の、めげることなく次々と湧き出てくる目標、意欲、行動力、こりない精神に感動する。「ラッセルがきつと思うよー。」とけん制する。60を過ぎてやりたいことがどうしようもないくらい出てくるのだ。それにひきかえ、私は食べたいものも行きたいところもないというか希薄で、しいて言えば、20代に「ヒマラヤに行きたい。北アルプスを歩き回りたい。」と思つたくらいのもので、恥ずかしい限りだが、まあ、みんな同じように意欲的でなければいけないということはない。私はそれでいいのであって、周囲の友人知人たちにあちこち引っ張られていってどこまでいけるものか、それも楽しいのである。